

首相、聞いて自殺の現実

首相、私たちの声を聞いて……。親を自殺で亡くした遺児5人が25日、首相官邸で鳩山由紀夫首相に面会する。先月の施政方針演説で「いのちを守りたい」と語った鳩山首相に対し、遺児をこれ以上、増やさないよう自殺対策の充実を訴える。メンバーの大阪大医学部保健学科2年、野崎望聖さん(22)＝神戸市＝は「自分の体験を話し、自殺の悲惨さを伝えたい」と話す。

【玉木達也】

野崎さんが両親と福

岡市に住んでいた中学2年の時、精神科医の父親が42歳で自殺した。宮崎県の親類を見舞いに行った際、自宅に一人残った父親が「寂しい。帰って来ないか」と電話してきたが、「帰れない」と切った。翌日、野崎さんの部屋のクローゼットで首つり自殺した父親を自分で見つけた。

小学校低学年までは仲の良い親子だった。徐々に夫婦仲が悪くなり、野崎さんはあまりかまわれなくなった。高学年のころ、寂しさから不登校になるなど不安定になり、ますます関係は悪化した。父親から精神薬の服用を

きょう面会 遺児の阪大生ら

強制された。

自殺したころは「父を憎んでいた」。遺書には母親の名前だけで自分の名前はなく、深く傷ついた。それでも涙が止まらなかった。

高校では父親と同じ剣道部に入部。「父を理解したい」という思いから、進路も当初、精神科医を目指した。

自殺前、部下の医療ミスで患者が死亡し、父親が責任を問われた。自殺の直接の原因とされるが、今も納得できない。部屋での自殺も「『自殺はこんなにひどいこと』と私に伝えるためだったのか」とも思っている。

国内の自殺者は12年連続で年間3万人を超える。面会は、内閣府参与として「自殺対策緊急戦略チーム」のメンバーも務めるNPO法人「ライフリンク」代表、清水康之さんが調整した。清水さんは「鳩山首相は遺児の思いを直接聞き、自殺対策に生かしてほしい」と話す。



「今の自分のできることば自分の思いを語る」と話す野崎さん＝大阪市北区で23日、竹内紀臣撮影